

結 論

以上のように仏教における言語について論及してきた。全体を通して衆生とは「言語の虚構性」によって妄想顛倒するのであり、そのような衆生に対して真実の言語が示される構造が釈尊以来特に中観唯識の大乘仏教思想の中に流れており、親鸞の言語観もまたそれらの言語観と同様の構造を有していることが明らかに出来たと考える。そのように言語によって迷う衆生は真実の言語との邂逅による以外救済の道は在り得ないのである。名号が言語である所以はそこにこそあると考えたい。

親鸞思想の現代的意義

——認識論的視点による伝道論——

五十香 正 明

目 次

はじめに

第一章 親鸞思想と現代

第一節 親鸞の求道体験の考察

第一項 「生死を出づる」ことの絶対性と親鸞の葛藤

第二項 「生死を出づる」という概念が持つ「絶対性」の非現実性

第三項 親鸞における自力性

第四項 主体に求められる「自己捨象体験」

第五項 自力思想と他力思想の融和の可能性

第二節 認識における諸問題

第一項 認識私論

第二項 「主観的事実」の応用の問題

第三項 想定された念仏者像批判

第四項 想定された信心批判（主に「法の深信」批判）

第五項 パラダイム転換への対応方法私論

第六項 再解釈の妥当性

第七項 絶対性批判

第二章 伝道をめぐる諸問題

第一節 現代の真宗教団を取り巻く現状

第一項 共同幻想について

第二項 宗教における世襲制が持つ問題点

第三項 過程に関わる宗教としての真宗

第二節 真宗教団の現状批判

第一項 自称獲信者の欺瞞性

第二項 アクトとパフォーマンスとの間に横たわる決定的差異

第三項 科学全盛の現代に鎌倉時代の「因果の道理」を語ることの無意味さ

第三節 真宗と禅宗の比較研究に見る、真宗の「獲信者」の利他行の可能性

第一項 『十牛図』における利他行

第二項 吉本隆明氏における「知の課題」について

第三項 「現生十益」に見る獲信者の利他行の可能性

第四項 禅の到達者と、真宗信者の共通点

第五項 伝道におけるフレキシビリティの重要性

第六項 自力聖道門の「行」と念仏行の差異

第七項 煩惱と恚意についての考察

第八項 二重基準批判

結論

親鸞思想が、「共同幻想」としての役割を果たさなくなった科学的・実証主義的な現代において、どのような現代的意義を持ちうるかを探る。

私はまず、真宗のもつ「神話性」を廃することに留意した。なぜならば、現代において真宗「神話」を語ることに、意味があると思えなかったからだ。意味がないばかりでなく、宗教が語る「主観的

事実」を「客観的事実」と取り違えることによって、多くの弊害が起きているように思われる。一例を挙げると、「造悪無碍」の異安心などである。この考えは主体の墮落のみ招く、宗教的意義を全く失ってしまっている考えであるが、これは、阿弥陀仏の救いを「客観視」して起こったものだと思われる。他にも文献学的方法論への偏重による「理論化」による弊害も大きい。私は、言葉と辞書の関係を例に挙げて論じた。言葉が辞書に記述を規定するのであって、辞書が言葉を束縛することは、本来的には本末転倒である。それと同じように、親鸞の思想は我々現実存在（親鸞も含めて）をいかにして救済しうるかという視点で生み出されてきたものであり、決してその表象によって我々の救済を規定・制限するものではない。そこを取り違えると、現在散見されるような文献を一步も出ない、硬直化した教義解釈、布教、伝道しかなされないことになる論じた。

現代の真宗教団を取り巻く環境についても一言を付した。世襲制の問題点は、宗教に帰依する際に自己の求道経験を経ないことにある。しかし、求道の過程こそが主体にとって最も重要なものなのである。

法然も、親鸞も他力思想に廻入するまでに、計り知れない葛藤を経ていると思われる。この葛藤こそが他力思想に廻入する「因」となったのであり、先験的に絶対者阿弥陀仏の教えを自明なものとして考えていたわけではない。科学的真理は客観的普遍妥当性を持つ

ている。しかし、宗教的真理は、他人から付与されるものではなく、自分で得証するものだ。極言すれば、宗教にとって、求道からの結果などさして重要なものではなく、自らの求道の過程のみが重要である。しかしながら、現代真宗教団においては、ともすれば阿弥陀仏による救いを自明なものであるかのように考え、また、人にもそのようなものとして勧めている。この現状を批判した。

ならば、現代において親鸞思想の意義とは何であろうか。洗練された他力思想の表象ということだけではなく、獲信者による現世での利他行が想定されるのではないかと私は考えた。そのアイデアの元となったのは、古来禅宗で珍重されてきた、『十牛図』の記述である。この『十牛図』には、禅者の修行とその到達の過程が偈頌に託して述べられているが、それによると、最高の到達者は、市井に入って自在の利他行を為すという。私は、真宗の獲信者にも同様の行為・作用が期待できるのではないかと考えた。その根拠としては、『自然法爾章』にもあるように、獲信者は自己のはからいを捨てているとされているからだ。獲信者は、自己を捨象して阿弥陀仏に帰依しているため、動静己にあらず、他人への愛や同情が生まれ、『十牛図』で示されている禅の到達者のような利他行が為し得るのではないかと考えた。獲信者が、未信者と異なる心境にあることは、『未灯鈔』にもそのような記述がある。

最後に伝道に関してであるが、宗教的認識は、主体により再解釈されることによって受容が為される。つまり、他人の宗教的真理が、

即、主体にとっての宗教的真理にはならず、なんらかの受容の契機が必要である。真宗の教えを皆に受容させるのは、当然伝道者の役割である。私が「法を伝える」のではなく、「法が伝わるのだ」ということがよく言われるが、それは、伝道者における心構えを語るものに過ぎない。やはり、法の伝達は、自らの領解を通じて行われざるを得ない。そう考えていくと、伝道者個人の役割が非常に大きいものであることが改めて気づかれる。宗教の救いが客観的な、自明なものではなく、主体の領解を通じて為されることを考えれば、いかに洗練された領解を伝えうるか、それは伝道者の肩にかかっている。

なお、伝道者が獲信していることが重要であることは言うまでもない。『十牛図』の記述に依れば到達者は自在の利他行を為すが、真宗の伝道者も、獲信していればこそ、必ずしも文拠にとらわれずに、自在の利他行を為し得るだろう。伝道の理想は、やはり、釈尊の説法がそうであったと伝えられる「対機說法」にあるのではないかと思われる。